

腹八分目



岡崎市医師会

会長 大原 憲一 氏

教育随想



平成15年2月1日

2月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
岡崎市医師会 会長 大原 憲一氏	
この人に聞く	2
9代目和ろうそく職人 磯部 亮次氏	
羅針盤	2
矢作北中学校長 柴田 隆夫	
ふれあい	3
大樹寺小 山中 理子 六ッ美北中 内山彩由実	
特集	4
教えの言葉 学びの言葉 今に伝わる 未来に伝える 子供たちへのメッセージ	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
体操指導における 各種伝達講習会(大正6年)	
この本を	8

最近、テレビや雑誌を見てみると、体に良い食品の特集をよく見ます。バナナが良いとかココアが良いとか、これを食べるとコレステロールの値が低下する、糖尿病に効く、血圧が低下する等々、マスコミはセンセーショナルに取り上げています。確かにこれらの事実は全く間違っていない訳ではないと思いますが、これらを鵜呑みにしてその食品を取り過ぎれば、体を壊しかねません。大橋巨泉が以前、週刊誌に「ココアが良いと聞き、毎日三杯飲んでいたら、コレステロール値が三〇〇を超え、テレビの司会者のMMに殺されそうになった」と、批判的な記事を書いていました。それぞれの食品には良いところもあれば、悪いところもあり、いろいろな食品を万遍なく食べることが大切かと思えます。

昔の医師である、貝原益軒は「腹八分目」と言っています。健康法は昔から大きく変わっていないようです。私も人生八〇%で生きていこうと考えています。一〇〇%頑張っても他人はなかなか一〇〇%評価してくれません。八〇%、つまり二〇%程度、手を抜くというか、肩の力を抜いてことにあたっても、そこその成果は得られ、ストレスも軽減できて、楽に生きていけるような気がします。これを私の人生のモットーにしています。



(おおはら けんいち)

ふるさとシリーズ この人に聞く



職人のネットワーク作り

九代目和ろうそく職人

磯部 亮次 氏

和ろうそくは、黄櫨はぜの実を原料とし、昔ながらの手作業で作る。

「作る手間はかかるが、火をつけるときの煤すすが少なく、周りを汚しません。そして、自然から作った和ろうそくの明かりには、自然に対する畏敬いけいの念を感じ、最近いひの癒しいやすを求めるときには合うと思います。」

と、磯部さんは語る。現在、父の跡を継ぎ、和ろうそく職人として活躍しているが、初めは継ぐつもりはなかったそうだ。



「大手コンピュータ会社の営業をしていました。二十六歳のとき、おやじが突然脳溢血いっけつで倒れたのです。十二月の最も忙しい時期で、困ってしまいました。おやじの姿を思い出しながら作るといった状態で、わからないときには病院の集中治療室まで聞きに行きました。」

「否応いやおうもなくろうそく作りの仕事が始まったわけである。でも、それが可能だったのは、それまで父親の姿を見ていたからだ。」

「おやじは、いつも難しい顔をして働いていました。跡を継ぐつもりはなくても、いつもその背中を見ていたのです。だから、いざというとき、なんとか真似まねをしてろうそく

を作れたのだと思います。十年過ぎて仕事に自分らしさが出てきたけれど、まだおやじには勝てませんね。」と笑って語られた。

今、磯部さんが熱心に取り組んでいるのは、職人のネットワークを作ることだ。和ろうそくを作るだけでなく、原料を生産している農家や小売店を回って話を聞いている。また、これまで職人の世界ではそれほど重要視されなかった同業種の職人の会も作った。

「こうした動きは、昔からの職人の皆さんから見ると、異端なのです。中傷を受けることもありませんが、負けていられません。そうしなければ、伝統工芸は続けていけないのです。『老舗が一番新しい』という言葉があるけれど、先人が常に新しいことを取り入れてきたからこそ、和ろうそくも廃れずに続いてきたのだと思います。人と人のつながりを作ること、職人の世界も活性化し、仕事も広がっていくのです。」

笑顔の中にも固い決意が感じられる語り口であった。

氏名 いそべ りょうじ
生年月日 昭和三十八年七月二十一日
住所 八幡町一―二七



人から学ぶ

矢作北中学校長

柴田 隆夫

私たち教師一人のもつ力は限られている。何かに困った時、気楽に助けを求めることができる人をいかに多く持っているかが重要である。そのためには、日頃からいろいろな人との出会いを大切にしたいと思っている。

私が算数・数学科教科指導員時代のことである。数学では円周率を π （パイ）で表しているが、ある中学校の先生から「 π の筆順はどうなっているのか、第一画目は左から右へ書くのか、それとも右から左へ書くのかと、生徒から聞かれたのだけれど分からないので教えてほしい」という質問を受けたことがある。

私も分からなかったもので、早速、知り合いで外国語に強いK先生に聞いた。ところが、K先生でもよく分からなかったらしく、ギリシャ大使

心を開けば

大樹寺小 山中 理子

「相手に心を開いてほしいと思っ
たら、まず自分の心を開くことが大
切というお話を聞いたとき、ぼくは、
B君の顔が浮かんできました。」

前大樹寺貫主中村良観さんのお話
を聞いたときのA君の感想である。

似たところのあるA君とB君は、
自分を主張するあまり、よく意見が
対立した。お互いの良さに気づいて
ほしいと思ひ、何度も話をしてきた。

「先生はA君がB君のことを気に
していることがわかってうれし
いな。きっとこれからは素直な気持ち
で話ができると思うよ。」

と言うと、軽くうなずいた。A君の
言葉を理解できずにいたB君に、
「A君はほんとうは仲良くしたい



と思っているんじゃないかな。」
と、放課後話すと黙って聞いていた。

数日後、色鉛筆を忘れて困って
いたA君に、B君が誰よりも先に色鉛
筆を差し出していった。

最近では、放課になると、A君が
B君を誘い、仲良くバスケットをす
る姿がある。

「先生、このごろ、A君とB君、
けんかが少ないし、仲よしだね。」

C君さんの言葉に周囲の子も同じ
ことを感じていたようだった。良観
さんの話がきっかけとなり、少しず
つ素直に心を開き始めた二人の姿を
見守っていたい。



トラの世話

六ツ美北中 内山彩由実

複雑な家庭事情の中で育ったA君
は、時に乱暴な行動をとることもあ
った。心が満たされていないと感じ
られてならなかった。ある時、彼の
家に立ち寄る機会があった。

「ほれ、見てみる。」

何とA君がこたつの中から大切そ
うに差し出したのは、小さな小さな



子猫。聞けば、捨てられて田の畔道
で寒さに震えていたところを見つけ
て拾ってきたということだった。部
屋の隅には、排泄をしつけるための
新聞紙が敷かれ、傍らには牛乳とご
飯も置かれていた。

「トラ、かぜひいとるみたいで、
鼻水垂らしとるんだぜ。」

「温かくしてやってね。お母さん
になったつもりで守ってやってね。」

子猫を気遣うA君の言葉。照れた
ような笑顔を初めて見せてくれた。
あのA君が、捨てられた子猫を大切
に育てようとしていたことを知り、
私は胸が一杯になった。優しい心、
慈しみの心を育ててやりたい。

「ええ、何やるといいだ。」

顔を見せると、トラの世話を聞い
てくる。寒い夜、トラと一緒に寝て
いる姿に思わずほほ笑んでしまう。

館へ電話をして聞いていただいた。
結局、どちらでもいいという結論で
あったのだが、中学校の先生には
「ギリシャ大使館で聞いてもらった
ところ…」と伝えた。その先生も自
信をもって生徒たちに説明できた
ということである。

しばらくして、チェコスロバキア
からお客様が学校へみえたことがあ
った。チェコ語なんて全く縁のない
私たちであったが、πでのギリシャ
大使館のことを思い出し、チェコ大
使館に電話をかけて、歓迎の言葉
「ようこそいらっしやいませ」を何
とのかを教えてもらった。それ
を使って控室を飾り、大変喜ばれ
たことが思い出される。

日頃からいろいろ多くのことが求
められる私たち教師である。そのす
べてを自分だけの力でやろうとする
と無理がある。その面で力を持った
人たちに助けてもらうことによつ
て、余裕ができ、案外、事がスムー
ズに進むことがある。

いろいろな分野で活躍している人
たちと少しでも交わり、その人たち
の良さや異なった角度からの視点を
知り、それを柔軟に取り入れていき
たい。そして、明るく元気な姿で子
供たちと共に歩む教師を目指したい。

教える言葉 学びの言葉

今に伝わる 未来に伝える 子供たちへのメッセージ



▲「自立」 野外劇（大樹寺小） 昭和59年より毎月23日を「自立の日」としている。全校で家康公の遺訓を暗唱したり、自立の誓いを立てたりするなど、子供たちの自立心の育成を目指している。

校門前に大きく掲げられた言葉、ひっそりとたたずみ、何気なく子供たちが目にする言葉、行事を通して実感できる言葉。学校に残された言葉に目を向け、先人の願いを子供たちに伝えたいものである。

昭和三十四年度卒業四クラスの記念品として、日本でも超一流の先生の言葉を戴いたらということになり、教頭先生と角谷米三先生が京都の湯川博士宅を訪れ直談判しましたが予期した通り玄関払いだったそうです。持参の筆、墨、紙と土産の岡崎名産の石灯籠を女中さんに託して、以後毎月必ずお手紙を出しつつ、半年後の五月五日の子供の日に葉書とともに書が送られてきました。角谷米三先生は当時をふりかえり「至誠通天」というか、東海中学校の生徒のために湯川博士も根負けしてくださったと感謝している。人間にとって一番大切なもの、これからの若人諸君の青雲の志の指針ともなれば望外の幸せである。と語ってくださいました。
（東海中開校五十周年記念誌より）

「學而不厭」には、次のような逸話がある。
東海中学校に残されている湯川秀樹氏筆の「學而不厭」には、次のような逸話がある。学校のなかを見渡すと、ふと目にする言葉がある。それは、合言葉や校訓、詩歌や訓示などさまざまである。その言葉一つ一つに、その言葉を残した先人の思いや願いが込められている。各校に残されたそんな「教える言葉・学びの言葉」をクローズアップしてみた。各校から寄せられたアンケートを見ると、その言葉、残された形、経緯は実にさまざまである。岡崎出身の著名な研究者や書家など、岡崎縁の方々が多く多くの言葉を残していることがわかる。また、先人の言葉が、校訓や目指す児童像として残されている学校もある。



▲「すべては光る」 石碑（竜美丘小） 坂村真民（詩人）筆
平成14年6月、開校25周年を記念して建立。子供たちに残したい言葉として真民氏に問い合わせたところ、直筆の書が届けられた。



▲「未知の偉大なるものを求め……」 書額（根石小）
木村資生（根石小出身・文化勲章受賞者）筆
昭和56年より、言葉と立像写真・庭園写真を色紙に印刷し、卒業記念品として贈り、励ましとしている。



▲「今は一度だけ」 石碑（矢作北中） 鈴木政夫（石彫家）作
平成7年、卒業記念品として建立。正門に位置し、登下校する生徒の目に自ずと触れ、生き方を示している。



▲「學而不厭」 書額・石碑（東海中）
湯川秀樹（日本初ノーベル賞受賞者）筆
昭和35年、卒業記念品として揮毫・建立。「学びて厭わず」（『論語』）の精神を生徒に話し、志学の指針としている。



▲「つとめてやむな」 書額（矢作南小） 本多光太郎（矢作出身・文化勲章受賞者）筆
昭和11年、名古屋へ来た帰りに立ち寄り揮毫。毎月12日は「本多博士の日」として、子供たちは、氏の生い立ちや生き方を学ぶ。



▲「ぼくの前に道はない……」 他11基（甲山中）
昭和58年より建立。高村光太郎や武者小路実篤などのさまざまな文学作品の一節が校内に点在する。自分の好きな言葉として選ぶ生徒も多くいる。

各校に残る「教える言葉・学ぶの言葉」

（アンケートより抜粋）

言葉	残した人（残されている形）	学校名
鐵心	本多光太郎 筆（書額）	矢作中
研學修道	本多光太郎 筆（書額）	矢作西小
熟考努力	本多光太郎 筆（書額）	矢作北小
求めてはげむ	本多光太郎（石碑）	常磐東小
つとめてやむな	本多光太郎（石碑）	緑丘小
高九清久	石田 茂作 筆（書額）	矢作中
行到水窮處	石田 茂作 筆（石碑）	矢作西小
啐啄同機	浅田 蓬村 筆（書額）	生平小
めあてを高くできるまでやれ	浅田 蓬村 筆（石碑）	梅園小
寒かった年の春には樹木がよく茂る	浅田 蓬村 筆（書額）	葵中
二度とない人生だから	坂村 真民 筆（書額・石碑）	三島小
故山白雲盡くるときなし	尾崎 士郎 筆（書額・石碑）	美川中
努力するものは必ず報われる	荻村伊知朗（石碑） （世界卓球選手権優勝深津尚子さんに贈った言葉）	奥殿小
常磐なる故山に学ぶ	元教育長 鈴木 正弘	常磐中

お知らせ

●教育最新情報

○学校の危機管理について

平成十三年六月、大阪・池田小学校の児童殺傷事件をきっかけに、学校の安全が大きく問われた。本市においても各学校が危機管理マニュアルを作成し、有事に対応できる体制を整えてきた。また、全教室と職員室を結ぶインターホンの設置など、環境整備も進められている。

幸い、岡崎市では今のところ大きな事件・事故は報告されていない。しかし、十三年度県内の学校内における犯罪件数は、二千三百五十四件を数え、十年前から確実に右肩上がりの推移を見せている。そこで、私たち教職員に求められることは、不審者の侵入のような大きな事件・事故



がいつ起きてもおかしくないという危機管理意識をもつことである。施設や設備の充実が仮に図られても、それを利用するのは教職員である。子供たちの安全確保の観点から、想定し得る危機を敏感にキャッチし、それに対する手を打つ必要がある。

今年度の学校安全管理の措置状況を調べると、学校内に不審者が立ち入っているなどの緊急時に備えた教職員の訓練を実施（予定含）した、と回答した小学校は三十四校、中学校は十四校であった。また、それに関する児童生徒の避難訓練を実施（予定含）した、と回答した小学校は二十九校、中学校は九校であった。各学校の危機管理マニュアルをより実効あるものにし、有事を想定したシミュレーション

ンや実際の訓練を様々な角度から行うことが一層望まれる。

今後、学校の安全を確保する上で、地域の方による監視の目は不可欠である。不審者や夜間侵入者を発見したときの措置など、具体的な対応策を検討する機会をもちたい。また、全市的には、子育てのネットワーク化の観点から、中学校区児童生徒健全育成協議会の連合体を組織して、学校と家庭、地域、そして警察や児童相談所との連携をより深めていきたい。

常に危機管理の原則である未然管理・最小管理・転化管理の三つを再確認し、二十一世紀の財産である子供たちが安心して学べる学校を築き上げていかなければならない。



▲不審者侵入対応訓練

●派遣研究員研究報告

志水先生から学んだこと

矢作中 田村 康則

本年度より、岡崎市教員派遣研修という制度が始まった。一年間、大学や研究機関の先生にご指導を受け、自分が決めたテーマに基づいて研究を進めていくという内容である。指導をいただくのは、愛知教育大学の志水廣先生であった。

志水先生といえば「授業診断」と呼ばれる独特な指導で全国的に有名な方である。私自身、先生の師範授業を見たり、講演を聴いたりしたことがあつて常に感銘を受けていたので、この話を聞いたときには大変うれしかった。

実際に自分が研究したのは「数学的活動」についてであった。毎月一回大学に向いて志水先生にご指導を受けた。色紙を並べる活動を中心に置き、生徒たちが自ら問題を見つけ、それらを解決していくという実践であった。方法の検討の際は、志水先生自身が

紙を並べる等の具体的操作もされ、多くのアドバイスを受けることができた。累積的な評価方法や発展的な学習についても取り入れることができた。論文にまとめるときも、

数学的活動そのものの定義や仮説の立て方からちよつとした表現の工夫まで、数学の本質に迫るご指導を受けとても参考になった。この一年で自分なりの数学的活動が確立できたことが大きな成果である。この研修を通して、紙面には書ききれないぐらい多くのことを志水先生から学んだ。このような機会を与えていただいたことに感謝している。



▲色紙並べを取り入れた授業

●表 彰

◆第三十六回愛知県教育研究論文

●個人研究の部

最優秀 北中 山本 則夫
優秀 小豆坂小 川本 祐二
佳作 六南小 加藤 嘉一
小豆坂小 金原 繁
広幡小 北原理恵子
三島小 成田 隆行
南中 坂元 干城
葵中 山田 義仁

●共同研究の部

佳作 根石小特殊教育部会
代表 平野 泉
六ツ美中・六ツ美中
部小研究推進部
代表 兵藤 雅春
鈴木 悟



▲第36回県教育研究論文入賞 市長報告

◆平成十四年度健康優良児童生徒

南 中三年 加藤 一也
はじめ一二四名

◆平成十四年度よい歯の児童生徒

三島小六年 高山 莉加
はじめ一二四名

◆平成十四年度岩瀬賞

(体位優秀校)

小学校男子 常磐南小学校
小学校女子 常磐小学校
中学校男子 城北中学校
中学校女子 東海中学校

◆歯科医師会長賞

(う歯治療率一〇〇%校)

小学校男子 生平小学校
秦梨小学校
奥殿小学校
竜谷小学校
小学校女子 秦梨小学校

◆第二十二回「海とさかな」

作品コンクール(研究の部)
特選 連尺小二年
杉浦 岩本 大谷 釵持
中田 足立 藤田 磯部
鈴木 江藤

中学校男子 河合中学校
六ツ美中部小学校
恵田小学校
河合中学校
中学校女子 河合中学校

◆第十二回朝日「ぼくとわた

しの健康」作文コンクール
特選 連尺小二年 石川 愛理

◆平成十四年度山火事予防の

ポスター用原画
林野弘済会会長賞
城北中二年 杉山めぐみ

◆平成十四年度愛知県読書感

想文コンクール
県教育委員会賞
六美西部小五年 伊藤 基樹
愛知図書館協会賞
矢作南小三年 橋本 孝文
梅園小五年 石原 梓
岩津中三年 市川 久乃

◆県学校図書館研究会賞

根石小四年 黒柳沙矢加
六ツ美中三年 足立 瑞樹

◆県優良賞

緑丘小一年 高橋ちよみ
広幡小一年 竹内 萌
常磐小一年 遠藤 若奈
矢作東小一年 徳原 誉人
細川小二年 小芦 昇子
六中小二年 藤井 貴信
本宿小三年 小久保拓也
男川小四年 大須賀美緒
藤川小四年 小久井啓太
小豆坂小五年 小田 薫子
緑丘小六年 富田 健斗
奥殿小六年 石川 新
附属小六年 近澤 絢子
河合中一年 原田 瞳
矢作中二年 野村 圭
河合中三年 川澄 晶子
附属中三年 神取 知美

新しい国語科の「学習・評価リ
テラシー」と授業作り

河合中 神谷あけみ

三年間の継続的研究の結果
残った課題を踏まえ、本年度
は「評価を通して意欲を高め、
確かな学力を深めていく国語
科授業の創造」を目指したい
と考えていた。そこに派遣研
究員の話をいただき、愛知教
育大学助教佐藤洋一先生の
ご指導が直接受けられるとい
う幸運に恵まれた。

先生からまず「時間数が限
られる中で新しい確かな学力
を保障するには、生徒の実態
と教材の特質を『評価基準』
から焦点化し、『段階的な』
学び方の指導を試みることに
と指摘された。

そこで、「読むこと」「話す
こと・聞くこと」の評価基準
モデルを模索しながら、第一
学年の二つの説明文教材を用
い、論理的叙述の理解(導入・
基礎技術、基本学習)↓レポ
ート原稿作成(応用・個性化
学習)↓グループ発表(発信・
交流学習)↓情報の学び方の



▲「魚を育てる森」でのプレゼンテーション

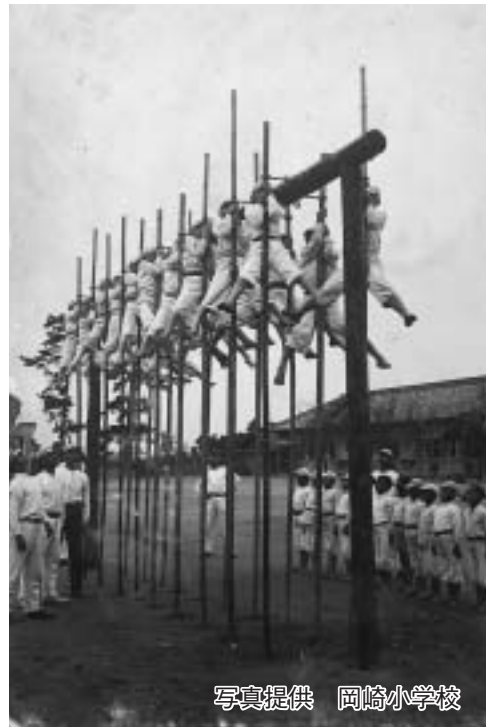
振り返り(評価・一般化学習)
と段階化した指導を、シンプ
ルなモデル学習として試みた。
ワークシート等を工夫し、学
び方Ⅱ評価の仕方が分かるこ
とで生徒が意欲的に学ぶこと
をねらい、また個のつまずき
を分析し支援の在り方を探っ
て、個性化を図った。
さらに、次の説明文ではプ
レゼンテーションを行い、発
信のための情報収集と資料操
作の段階を中心に指導した。
学習の方法がわかった、と
自信を表しながら学ぶ生徒た
ちの姿に、九か月間の実践の
成果を見る思いがしている。

・カ
ツ
ト
葵
中
高
木
理
人

フォト・ヒストリー

岡崎の教育

近年、子供の体力・運動能力の低下が報告され、体力づくりが課題のひとつとなっている。
本校では大正四年、伊野鯉之助校長が小学校での体育を盛んにする必要性を唱え、「健康第一」を学校目標にした。当時はまだ珍しかった鉄棒や跳び箱、はんとつ棒等を取り入れ、体力づくりを進めた。器具を使った体操を広めるため、参加者を募り、講習会を行い、その成果を発表した。写真は、全国から集った多くの参観者の前で、得意な技を見せているところである。
岡崎の健康教育は、それ以来脈々と受け継がれている。



写真提供 岡崎小学校

体操指導における各種伝達講習会（大正六年）

新雪を踏み締め、元気に登校する子供たち。春には新緑に覆われる木々も、秋には真っ赤な紅葉に彩られる通学路も、今朝はすべての色を隠し、白色の景色が広がる。白い息をはずませ、朝のあいさつをする子供たちの頬の赤さが増す季節である。

シ オ ス ア

垂訓を前にしばし考える。先人に負けず、自分も一つ、子供たちの心を打つ言葉が言えないものか。そして、思う。着飾った言葉でなく、子供たちのがんばりを素直な言葉で褒めることから始めよう。成長を願う先人の思いに負けまいと思う。

応援の先生たちに励まされ、生徒たちが入試会場に向かっている。調査書の評定が、平成十六年度入試から絶対評価に変わる予定である。入試制度の変更は、進路指導にかかわってくる。生徒のより良い生き方を願う新たな進路指導の模索が始まっていく。

朝日を受け、新築中の体育館の屋根が光る。工事に伴い、校庭の遊具が撤去され、運動場は狭まった。「もうすぐできるね」「早く入りたいな」と、子供たちは完成を待ち焦がれる。新体育館の中で子供たちの歓声とともに一緒に跳び回る日が待ち遠しい。

この本を

- * たすきがくれた奇跡 荻野 滋夫 郷土出版社 ￥1524
- * 若者たちは今 浅井 勉 歴人社 ￥1300
- * 本当の学力をつける本 陰山 英男 文藝春秋 ￥1238
- * 生き方、六輔の 永 六輔 飛鳥新社 ￥1300

* 異形の将軍 田中角栄の生涯 上・下 津本 陽 各￥1700

政治家『田中角栄』の功罪については議論が分かれるところであるが、類い稀な政治家であるということに対しては、誰しも異論の余地がないであろう。

本書は、その田中角栄の生涯をきめ細かい取材を通して浮き彫りにし、人間『角栄』の本質に迫ったものである。小学校卒の革命的政治家、抜群の記憶力と先見性、また人の心情に巧みに入り込む手だて等、新潟という土壤をもとにしたその生きざまの明暗は、読む者を魅了する。